

# ザ・ヘヴン

鈴木剛介 著

2015/06/25 執筆開始

2015/07/08 執筆終了

400字詰原稿用紙換算約140枚



『ハートメイカー』（青山ライフ出版）の経済に関するチャプターで自著引用した『火の鳥 0528』という作品は、「火の鳥」という不老不死の薬が、誰でも無料で手に入る時代が到来したことにより、肉体の「死」が消えた世界を描いた近未来SF小説でした。（未完ながら）

本作『ザ・ヘヴン』は、逆に、靈魂の不滅が常識となった世界を描く近未来SF小説です。つまり、両作品は表裏であり、どちらも人間の人生から「死」というボーダーが消えることによって、人間の価値観や世界観、実社会の在り様が、どう変化するのかを思考実験した「妄想小説」。

当然のことながら、哲学を志す人間にとって「死」は最大のテーマです。また、世界に現存するすべての小説は「死」を前提しないと、ストーリーが成立しない。（少なくとも、私は「死」が存在しない世界を描いた小説を読んだことがない）じゃあ、その「死」という物語（人生）の基本的な前提を取っ払ってしまったら、どんな物語が書けるのか？ そんな作家、物語クリエーターとしての本能と好奇心が書かせているのが、本作品です。

読者に伝えたい（押し付けたい）メッセージというものは、この物語の中には、一切存在しません。

一人の「妄想家」の趣味に、しばし、お付き合い頂き、暇つぶしとして楽しんで頂けましたら幸いです。

バリバリの哲学小説である『THE ANSWER』（角川書店）を書いていた、ガチガチの理詰め人間が、10年後になって、こんな小説を書くことになるとは夢にも思いませんでしたが、ある意味では、この作品が、理詰めを突き詰めた果てに辿り着いた、私個人にとつての「究極の真理」です。

## ★プロローグ

エベン・アレグサンダー著『プルーフ・オブ・ヘヴン 脳神経外科医が見た死後の世界』（早川書房／2013）が世に出て以降、「死後の世界」「肉体を持たない靈魂の世界」が存在するということは、徐々に世界的なコンセンサスとなった。

それまで、いわゆる「スピリチュアル」と呼ばれる世界観は、あくまでキワモノ、オカルトとして捉えられて来たが、いわば傍流が主流になる形で、「眼には見えない世界の探求」は王道の科学となった。そして、天動説から地動説への移行をなぞるように、眼に見える事象しか信じることの出来ない唯物主義的世界観を持つ人間は「時代遅れで頭の固い者」と見なされるようになった。そうした人々は「オールド・タイプ」と呼ばれ、スピリチュアリズムを受け入れた先進的な人々から区別された。

宮本好孝（みやもと・よしとか）は、そうした時代の価値観、世界観の移行期にあった親に育てられたため、他の多くの若者と同じように、完全な「ニュー・タイプ」。すなわち、死後の世界を100%、信じていた。

オリンピック、マナー・ゲーム、戦争、環境破壊、受験、そして延命医療……。旧世代の人間たちは、いったい、何を求め、どこを目指していたのだろうか？ と、好孝は思う。肉体を持った物質世界での生活等、所詮、かりそめに過ぎず、本当の人生は死んだ後に始まる。そう考えることが常識となった好孝たちの世代にとって、物質主義的世界観に閉じ込められていた世代の人間たちが、この地球上で行って来た行為のすべてが無意味に感じられる。

早く、死後の世界に行きたい。

多くの「ニュー・タイプ」と同じように、好孝も、そう思う。肉体は重くて、ウザいから、早く、脱ぎ捨ててしまいたい。でも、自殺すれば、自分の意識が地上から離脱出来なくなることも分かっている。そのことが常識となって以降は、自殺者は極端に減った。誰だって、死んだ後になってまで、苦しみたくはない。

「オールド・タイプ」から「ニュー・タイプ」への移行期には、使命（ミッション）に駆られた人間が、社会にたくさん登場した。人間が、この世に生まれて来たことの意味を熱く語る人々。意味なく生まれる生はない。誰だって、役割を持って、この世に生まれて来る。でも、スピリチュアリズムが世間の常識になって以降は、そうした人々も姿を消した。もはや、誰も「人生の意味」なんて考えていないし、死を恐れる人間も（オ

ールド・タイプ以外)存在しない。誰もが、死後の世界への旅立ちを望んでいる。物質社会でムキになって争う人間が消えると同時に、肉体を持った生の意味も消えた。

「魂を磨くこと」「物質主義的快樂を求めるのではなく、精神性を高めること」

それが「ニュー・タイプ」の唯一の関心事だ。なぜなら、それが「本当の人生」である死後の世界を良く生きるための、唯一の手段だから。

好孝の世代には「金をたくさん稼ぐこと」の出来るステイタスの高い職業に就く」という価値観はない。

「金」という概念は、「困い込むための価値」ではなく、世界全体の共有インフラとなった。金をたくさん得る者は、金のない者に金を与える。金を与えられた者は、金を与えられた分、自らの責務を果たし、社会に貢献する。

好孝の父親は作家で、旧世代を痛烈に批判する啓蒙書で巨額の印税を得たが、その収入の多くを金がなくて困っている人たちに与えた。この時代にあつては、それは「慈善」ではなく、当然の行為と見なされる。現在でも巨額の富を独占している「セレブ」とかつて呼ばれた一部の人種は、軽蔑の対象と見なされている。結果「格差」と呼ばれた社会現象は消え、社会の生活水準は、急激に均一化された。稼ぐ者は稼いだ金を貧しい者へと分け与え、貧しい者は、与えられた金で、己と家族の生計を立てる。循環する経済構造が構築されつつあった。金が循環して来るからといって、生活を怠ける者はいない。なぜなら「魂を磨くこと」を怠れば、それはそのまま死後の暮らしが豊かでなくなることに直結することを、誰もが知っていたからだ。

「数字」「数値」に踊らされる人間は、もういない。価値の基準は世間的な評価にではなく、自身の自覚の中にある。それが、現代のスタンダードだ。

誰もが真面目な顔をして、肩肘張って暮らしていたわけではない。お笑い芸人もいれば、下らないバラエティー番組もあった。アイドルもいたし、ゲーマーもいた。でも、「金を稼ぐこと」を目的として働く人間は、ほとんどいなくなった。AV女優だって「人を喜ばせること。人の役に立つこと」に、意義と充実を見出し、仕事していた。同時に犯罪者は急激に減少した。「地獄に落ちる」という言葉が比喩ではないことを、多くの人間が知ったからだ。霊能科学者の研究によって死刑囚の死後の霊の証言が集められ、肉体の死後、悪しき魂が永劫苦しむ様が克明に描写され、世間の周知となった。

死んだ後になって苦しむくらいなら、犯罪に手を染めるよりも、生きている間に克己した方がマシ。

そうした考え方が、かつて「アンダーグラウンド」と呼ばれた世界においても、コンセンサスとなりつつあった。

\*

好孝は、高校で半分は「オールド・タイプ」の学問を学び、半分はスピリチュアリズムについて学ぶ。高偏差値の大学という概念は解体され、自身が得意とする専門技術を習得するための大学進学が通常の進路となった。

「今生の肉体を持った世界で魂を磨く」

そのために、自分に何が出来るのかを模索するのが好孝の高校生活だ。

好孝には、同じ高校3年のクラスに、城谷マリという「ツイン・ソウル」がいる。肉体を持つ前、彼女とは双子の魂だった。前世では、マリは好孝の妹でもあった。そのことは「ニュー・タイプ」である二人にとって自明のことであり、出会った時から、赤い糸で結ばれていることは直感的に二人とも把握していた。だから、好孝は、マリといえる時、何も話すことはなくても、心からリラックスして、すべてを彼女に委ねていることが出来る。マリも好孝には、何も飾ることなく、いつも自然体だ。二人でいると、互いに、とても暖かい空気に包まれているような感覚になる。当たり前だ。元々は「一つの魂」だったのだから。

「ヨシタカとは、一生、このまま一緒にいるんだね」

と、マリは言う。

「死んだ後も、ずっとね」

と、好孝は答える。

好孝とマリが初めてセックスをした時、好孝は童貞で、マリは処女だった。そして、その初めてのセックスで、マリは妊娠した。

マリは、やがて、新しい魂の宿った生命を、この世に産み落とす。好孝は、マリと、その子どもと新しい家庭を作る。

好孝は高校を卒業したら、老人介護の仕事に就きたいと考えている。無理な延命医療を行う老人も、死を恐れる老人も、ほとんど消えた。けれど、肉体が衰え、死期を迎えた老人を、安らかに「あの世」に送り出す手助けをしたいと思う。今生での役を終え、何も案ずることのない死後の世界に、スムーズに送り届ける手助けがしたい。

競うこと、争うことを止めた世界は、とても穏やかであると同時に退屈でもある。旧世代は、とにかく、がむしゃらに、新しい刺激を求めて、気が狂ったように「進歩」を求めた。でも、今は、ただ、自然が巡る中で、誰も、どこも目指すことなく、ただ、日々を生きている。やがて訪れる至福の死の瞬間を待ちながら。

旧世代の人々は、何とか戦争を食い止めようと、環境破壊を食い止めようと、懸命の運動を続けて来た。でも、抗うものがある、というのは、それだけで、ある種の「生きがい」ともなった。抗うものなくなった現在、人々は、やがて訪れる死を待ちわびながら生きている。

死後の世界は、限らない愛と穏やかさに満ちている。意識が肉体を離れた後の世界について、「ニュー・タイプ」は前提的な常識として理解している。

だが、肉体が死んだ後の世界を夢見ながら、肉体を持った今生を生きるということは、どこか果てしない虚しさを伴う。

「いつそ、全人類がまとめて死んだら、全人類は、何も気に病むことのない霊的な集合体になるんじゃないかな」

好孝は、マリに、そう言ってみたことがある。

「確かに、そうかも知れない。でも、私はヨシタカと、こうして肌と肌を触れ合っている肉体の感触が好き。そして、自分の子どもを、この手に抱いて、家族として、この物質的、現実的な世界で生活してみたい。死後の世界には、きっと喜怒哀楽の感情がない。この肉体を持った世界で、ヨシタカと喧嘩し、ぶつかり合い、仲直りしたり、同じ食べ物食べて美味しいと感じ、一緒に美しい景色を観て、感動を分かち合いたい」

マリに真っ直ぐに眼を見て、そう言われた時、好孝は、自分が肉体を持っていることの意味を悟った気がした。

死後の世界は、何も気に病む必要のない、愛に満ちた場所だろう。そこでは「自我」も「欲得」もなく、すべての意識体と一つに和合出来るのかも知れない。

けれど、この肉体を持った世界で、時に泣き、笑い、苦しみ、もがき、あがき、のたうち中で、人間の魂は成長し、より高次の精神世界の中の幸福を得ることが出来る。

肉体を持った世界は言うなれば学校で、死んだ後に社会人になる。善き社会人になるためには、しっかり学校で勉強を積まなければならない。マリと、子どもと一緒に。

争うことも、競うこともない世界は、平和なユートピアであると同時に退屈なデストピア。でも、これが、おれたちが生きる世界。

「ねえ、ヨシタカ。わたし、もう転生したくない。今生で死んだら、肉体のある世界に戻って来たくない」マリがピュアな眼差しで言う。

「それは誰だって同じだよ。肉体のある人生に戻りたい人間なんて、いない」好孝は笑って答える。

マリの両親は日本人だが、マリの瞳には、見る角度によって薄くブルーの陰が入ることがある。

おれたちは、もしかしたら、過去生で古代北欧に生きた部族の中の姉妹だったのかも知れない。

魂は、時空を超える。

死後の世界に時空間の概念が存在しないことは、アンビジュアル・サイエンスの世界にあつては、もはや常識だった。

眼を閉じると、つい、死後の世界に思いを馳せてしまう。けれど、おれは、まだ死んでいない。肉体を持ち、食べ、動き、生きている。死後の世界を頭に思い描きながら、物質世界を生きることの違和感に、好孝はいまだ馴染めずにいる。

でも。と、好孝は思う。

マリと一緒に寄り添い、歩く世界。死んだ後のことを考えて生きても仕方ない。今、生きる、この肉体を持った世界で、精一杯、人生と格闘し、喜び、楽しむこと。

肉体があつても、なくても、マリとの「愛」は、文字通りの永遠普遍。好孝にとつて、本当に大事なことは、その一点だけ。

好孝は、傍らのソファで眠るマリの頬に掌をあて、その皮膚の放つ体温を、心行くまで堪能した。

## 1…好孝ノート

好孝とマリは、10ヶ月後に生まれて来る息子に「春馬」と名付けた。医療技術が進歩した現代にあつては、妊娠検査薬で受精卵の性別まで判明する。「春馬」と名付けたのは、ニュー・タイプゆえの直感だ。二人とも時を同じくして、そのネーミングが頭に閃いた。理性は間違うが、直感は間違わない。オールド・タイプの時代、心の在り様としての人間社会も、物理環境としての地球という天体の在り方も、おかしな方向へと突き進んで行ってしまったのは、人が「心の声」に耳を閉ざし、頭（理屈）で物を考えるようになったからだ。

「好孝、もし、頭で悩み、迷ったら『心の声』に素直に従え。そんな事態に陥らないことは100%、承知しているが、おれは、大切なものを守るために、どうしても人を殺す必要に迫られれば、何の迷いもなく人を殺し、刑務所に入る。それが『正しい』生き

方だ」

好孝の父親は説教臭いことを滅多に言わない人間だったが、亡くなる数日前に書齋に呼ばれ、告げられたその人生訓は、生きる指標となって、今でも好孝の心の奥深くに刻まれている。

「言霊」は、マテリアルの世界で時空を超える。

好孝は、高校で陸上部の練習を終えた後、帰宅してから、夕食までの間に「春馬」に向けて手記を綴るようになった。魂は永遠に死なない。けれど、物質としての、肉体はやがて消える。今生で春馬と会話出来るという確証はない。いつ、肉体が減んでもいいように。それは、好孝から、息子・春馬に宛てた遺書でもあった。

\*

春馬へ、パパより。

春馬がこの「手紙」をいつ読むことになるのかは分からないけれど、中学生くらいになったら、内容がちゃんと理解出来るように、出来るだけ優しい言葉で、分かりやすく、君に知らせておきたいことを伝える。「本当のこと」を。少なくとも、今、現役の高校生であるパパが「これは、100%間違いない、絶対に正しい本当のことだ」と断言出来ることだけを。

春馬には信じられないだろうけど、パパのパパ、つまり君のおじいちゃんの時代には「眼に見えるもの、手で触れるものだけ」しか信じていない時代があった。今は、霊的な事象と物理的な事象を総合した世界の研究を「科学」と呼ぶけれど、当時、霊的な事象は「疑似科学」つまり「ニセモノの科学」と呼ばれ、多くの人が死後の世界や靈魂の存在を信じていなかった。びっくりだろう？

君のおじいちゃんが生まれる、遙かはるか大昔には、地球が宇宙の中心にあって、太陽が地球の周りを回っていると考えられている時代もあった。

春馬、決して忘れてはいけない。自然はいつも正しく、普遍だ。でも、人間の常識、価値観、世界観、というのは時代、時代で変わるんだ。だから、春馬がおじいちゃんになる頃には、パパの常識は、もう通用しないかも知れないね。

17世紀に生きたガリレオは、今でこそ子どもが読む「偉人伝」の主人公だけど、存命中は、多くの人が彼を「いかかわしい説を唱える異端」と見なしていた。でも、天動説では説明の付かない多くの現象が確認され、やがて「異端」は「正当」になった。霊

的事実も同じだ。「霊界は存在しない」と考えると、矛盾が増える。「霊界は存在する」という前提を受け入れてしまえば、不可解な事象の説明にも筋が通るようになる。「パラダイム・シフト(価値観が根底から覆ること)」は、そのような推移を経て、実社会で具現化する。

「パラダイム・シフト」の過渡期には、新しい価値観を商売に利用する「いかさま師」「ペテン師」がたくさん登場する。だけど、「異端」が「正当」になれば、「いかさま師」や「ペテン師」は淘汰される。

比較的、古いマーケティング用語に「キヤズム理論」という言葉がある。アンビジュアル・サイエンスが確立されたのは、すなわち、霊的な事象が正当な「科学的対象」と見なされるようになったのは、2018年以降。つまり、この年にスピリチュアリズムにおける「イノベーター(先駆者)」と「メインストリーマー(一般大衆)」の間にあつた深い「溝(キヤズム)」が埋まった。端的に言えば、全世界におけるスピリチュアル・コンテンツの占有率が、2018年に「16%」を超えたんだ。

SAGA(英国スピリチュアリスト協会)の主導で「スピリチュアリズム」が先進国で一斉に義務教育化されたのは、割と最近だけど、ムーブメントが起爆した直接のきっかけは、2015年9月23日に起きた「あれ」だ。「あれ」については、もう知っているね? パパのパパ(春馬のおじいちゃん)が予言(預言)した「あれ」が現実に入ったことで、世界中の人が「霊からの声」を信用せざるを得なくなった。そして、「あれ」をきっかけにして、世界はまったく新しい姿へと脱皮を始めたんだ。

春馬が学校で勉強しているのは、最新の霊界事情だから、人間界における古典的なスピリチュアルの歴史を、簡単に、パパから説明しておきたいと思う。

霊魂や預言、シャーマニズムといった概念(感覚、考え方)は、人類誕生の歴史と共にあつただろうけど、思想体系としての「スピリチュアル」という哲学の祖は、アメリカの霊覚者・アンドリュー・ジャクソン・デイヴィス(1826-1910)だろう。

## 2::奥多摩エリア

好孝は、そこで「手記」の執筆をいったん切り上げ、キッチンへ行った。

コンロの火の前に立つマリを背後から、そっと抱きしめ声を掛ける。

「今日の夕食、何?」

「トン汁」 マリは答える。

「いいね」

マリの傍を離れ、冷蔵庫からキュウリの浅漬けを出す。炊飯ジャーからご飯をよそい、箸、そして麦茶のグラスを二人分、テーブルにセットし、椅子に座る。マリが井によそったトン汁を好孝の前に置く。

「マリ、ご飯を作ってくれてありがとう。頂きます」

好孝は掌を合わせる。

「どういたしまして。召し上がれ」

マリが、好孝の前の椅子に座り、優しく微笑む。

「うん、美味しい」

好孝は井に口を付け、言う。

「ヨシタカは、私が何を作ってもそう言う」

「だって、いつも美味しいから」

お世辞ではなく、マリの作る料理はいつも美味しい。けれど、偽善ではなく、好孝は、ただ「食べるものがある」ということ、そのものに深く感謝している。2015年に起きた「あれ」以前、人類は感謝の心を失っていた、と、父親は、よく語っていた。

食べるものがあること。帰るべき家があること。傍らに、温かい人肌があること。

それが、どれほどにありがたいことであるか、今の世にあつては、誰もが自覚し、意識している。

好孝とマリが暮らしているのは奥多摩エリア。倒壊した高層ビル群の廃墟となったトーキー都心部は空洞化し、住民は、自分たちが好む風土の土地に分散して暮らしているが、奥多摩は人気のエリアで、エリア人口は約6万人。駅前には映画館もあり、商店街も活況を呈している。

今、この、太い柱が黒くすすけた古民家に暮らしているのは、二人だけだが、やがて

住民は、もつと増えるかも知れない。

オールド・タイプの世代は「家族」と言えば、主に血縁の核家族を意味していたが「戸籍」と言う制度は、すでに廃止されており、現在「家族」と言う言葉は血縁を意味しない。

ニュー・タイプの世代にとって「家族」とは「霊的に繋がった者同士」を指すので、母親が二人いても、血縁以外の子どもがいても、それはごく自然なことと見なされる。だから、生活共同体としての「家族」は、「ペア（夫婦）」や「コア（核家族）」だけの場合もあれば、数十人の「家族」が共同生活を営む場合もある。

要は、支え合い、助け合う者同士が「ユニット」になればいいのだ。

まだ若い二人は、二人だけの生活を望んだが、やがて子ども（春馬）が生まれれば、大家族の中で暮らした方が過ごしやすいのは自明だ。ただ、今は、10代の新鮮な「性」を、心行くまで謳歌したいと、二人とも思っている。

食事を終え、二人は、囲炉裏の脇に寝転んでテレビを観た。

いまだき「数値」「数字」「金」のために番組を作る人間はいない。作りたい番組を、作りたい人間が作っている。だから、制作スタッフのモチベーションは高く、出演者は、みな、おおらか、朗らかだ。オールド・タイプの世代で極限まで衰退した「テレビ」というメディアは、現在、再び、お茶の間の娯楽の王道として復権した。番組の間に、企業の商品CMが差し挟まれることはない。

「この、お笑いって関東？」

好孝が訊くと「当たり前じゃない。関西の人間は、このギャグじゃ笑わない」と、マリが、おかしそうに返事をした。

マリは小学生まで神戸エリアで暮らしていたので、関東と関西を別種の文化圏だと見なしている。マリは「関東が陰で、関西が陽」だと言う。ニュー・タイプには「陰陽（おんみょう）」が見える（読める）人間がいる。陰陽で言うならば、好孝は陰で、マリが陽だ。どちらが良い、ということではない。あまねく万事において大切なことは、陰陽のバランスを見極めること。近年では、そのバランスを見極めることを生業とする「陰陽師（おんみょうじ）」が人気職種になっている。

二人で30分ほど、テレビで馬鹿笑いした後、好孝は食器を洗い、居間の隅に置いた小さな机の上で、再びPCに向かった。やがて生まれて来る息子・春馬への手記の続きを書くために。

……霊魂や預言、シャーマニズムといった概念（感覚、考え方）は、人類誕生の歴史と共にあっただろうけど、思想体系としての「スピリチュアル」という哲学の祖は、アメリカの霊覚者・アンドリュー・ジャクソン・デイヴィス（1826-1910）だろう。

霊界からマテリアルの世界への働き掛けというのは、ある時代に集中的に発生する傾向がある。春馬のおじいちゃんが予言（預言）した「あれ」が起こる直前、21世紀の初頭にもスピリチュアル関連書籍の刊行点数が急増したし、1800年代も霊現象が多発した時代だった。アンドリュー・ジャクソン・デイヴィスは、その先駆けで「スピリチュアリズムのヨハネ」と言われた。

彼には、生まれつき霊視能力があったのだけど、17歳の時に、近くの町で行われた講演会に出掛けて行き、催眠術を掛けられたことがきっかけで、透視や読心の能力を発揮するようになり、やがて霊的な力による治療を行うようになる。霊的に憑依された、入神状態での講演をまとめて、彼が出版した『大自然の摂理』『大自然の啓示』『人類に告ぐ』という三部作の本は大反響を呼び、当時のアメリカの知識階級にも大きな影響を与えた。

彼が著作の中で語った、意識の死後存続、霊的存在こそが實在（主体）であること、予言的な内容、理想的な人間社会の在り方、といったトピックは、その後の王道のスピリチュアリズムのフォーマットになった。

こうした「霊的メッセージ」を世間に届ける役を担うことをミッションとする人がいる一方で、「霊的物証」の媒体となる人物もいた。

霊界は、その實在を人間に知らせるために「眼に見える力」を物質世界に及ぼす場合がある。その典型的な人物が、ダニエル・ダングラス・ヒューム（1833-1886）だ。

スコットランド、エディンバラに生まれた彼は、幼少時から霊能力があり、近代以降でもっとも強力な物理霊媒とされる。生涯一度もイカサマだという証拠を掴まれたことはなく、部屋の暗さや静けさなども問題に仕なかつたし、現象が起きないときも平然としており、慌てたりごまかそうとするようなことはなかつた。

ヒュームの心霊現象を見た者は王室関係者や著名人を含めて桁はずれに多かつたし、彼は研究者の調査にも快く応じた。

数多く報告記録の残る彼の起こした心霊現象は、非常に明瞭な形を取り、スケールが大きかつた。

空中浮遊、腕や脚と共に身長が30センチ近くも伸びること、真つ赤に燃える石炭で顔を洗ってみせたり、同席した者にも同じように触れさせること、テーブルやソファなどの重い家具が動くこと、霊的な手が現れて出席者と握手したり品物を運んだり楽器を演奏したりとさまざまな動作をすること、光や火球が飛ぶこと、部屋が地震のように激

しく振動すること、霊の全身が物質化して出席者に見られること、入神して、知らない言語で喋ること、等々。

こうした物理的心霊現象の極め付け、1800年代、スピリチュアリズム勃興の起爆剤となったのが、アメリカ人の「フォックス姉妹」だ。

1847年12月11日、フォックス家のマーガレットとケイトの姉妹は、両親と共に、アメリカ合衆国ニューヨーク州北端の村、ハイズビルの一軒家に引越してきた。

そのハイズビルの家では「ラップ現象」が起こるため、家族は、その原因不明の音に悩まされ続けていた。そのため、1848年3月31日の夜、姉妹は「音の主」との交信を試みた。交信方法は、姉妹が質問し、「イエス」なら音を一回、「ノー」なら二回、「音の主」が音を鳴らすというシンプルな手段。交信は成功し、霊とのコミュニケーションが成立した。

やがて、この交信が近所に広がり、アルファベットに音を対応させることによって、「音の主」から文章を獲得することに成功する。

その文章から、音を鳴らした霊は、その家に前に住んでいたチャールズ・ロズマという名の行商人で、奥さんと二人の息子と三人の娘がいること、そして、5年前に、この家に宿泊していたジョン・ベルという男に殺され、500ドル奪われ地下室に埋められたことが判明した。音の主である霊は、殺されたのは火曜日の深夜12時で、この家の東の寝室に滞在していた時、肉切り包丁でのどを切られたと訴えた。

後日、この家の地下室の壁の下から、ほぼ一人分の人骨と、行商人用のブリキ製の箱が発見された。そして、これが「霊現象」の事実を裏付ける結果となった。

この事件は全米中の注目を集め、姉妹はカリスマとなって巨万の富を得（後、欲に目がくらみ、悲惨な末路を辿る）、ピーク時には150万人もの信者や支持者がいた。

以降、19世紀後半から20世紀初頭にかけて、特にアメリカやイギリスで交霊会や心霊現象研究が盛んになり、やがて、ヨーロッパ各国や日本にも飛び火して行ったんだ。

春馬のおじいちゃんも「霊媒」だったけれど「霊媒」とは、いわば「電話機」みたいなものだ。「あつちの世界」にいる眼には見えない人たちが電話を掛ける。「霊媒」が中継器となって「こつちの世界」にいる肉体を持った人たちにメッセージを届ける。

肉体的に、様々なアレルギー体質の人間がいるように「霊媒体質」の人間と、そうじやない人間がいる。現在では、多くの人が霊的な能力を覚醒させているけれど、当時の先進国には、霊のサイドが「媒体」として使用出来る、高性能の「電話機」は、ごく僅かしかいなかった。「聖書」に登場する、遙か古代に生きた、ノア、モーセ、アブラハム、イエスは、皆、超高性能電話機だった人たちだ。

パパのパパは、自分のことを「コネクター」「トランスレーター」もしくは「霊の奴隷」「霊のツール」と自分のことを呼んでいた。君のおじいちゃんは、霊界からのメッセージを、一方的に、人間に届けることしか出来なかったからだ。でも、双方向でやりとり

が出来る「霊媒」も、もちろん昔から、たくさんいた。スピリチュアル近代史における、その最重要人物が「シルバークーチ」だろう。

厳密に言えば「シルバークーチ」は人物じゃない。1900年代初頭にイギリス人の若者を「霊媒」に使った、古代アメリカ先住民の霊の名だ。指導霊である「シルバークーチ」は霊媒を使って60年間に渡って人間と双方向でやり取り(質疑応答)してメッセージを届け続け、そこ(交霊会)で「シルバークーチ」が残した心靈的教訓が、今、春馬が学校で勉強している「アンビジュアル・サイエンス」の礎(いしずえ)を築いたと言ってもいい。

\*

好孝は、そこまで書くと、いったんPCの前を離れ、キッチンで湯を沸かし、緑茶を淹れて縁側に座った。気付くと、3時間が経っていた。マリは先に寝室で寝たようだ。視線を夜空に上げる。

ネオンや余計な明かりの一切ない、この付近では、星々がくつきりとした輪郭で光彩を放っている。この星々のすべてと、おれは連動している。天体の動きから、自分の身体の中の細胞の活動まで、すべては「繋がって」いる。そんなことは、小学校低学年で学ぶ、当たり前前の常識だが、それでも、自分と宇宙のすべてが繋がっている、ということに思いを馳せる時、その事実のスケールの大きさに圧倒されるような感覚に陥る。

星々の輝き、夜の闇、木々のざわめき、空気の揺らぎ、瞬きする自分のまぶた、そして、脳、心臓……。一つが動けば、すべてが動く。すべてが連動、連鎖し、フラクタル・パターンを描く。そして「気」が流れる。

頭の中がマクロに振り切ると、反動で、意識がマリへと引き戻される。

愛しい、マリ。

妊娠中だけど、マリを抱きたい、というキュンとした切ない思いに駆られた。けれど、もう寝ている。さすがに起こしては悪い。

マリも、おれも明朝は、午前8時までには登校しなければならぬけれど、今日は、徹夜してしまおう。書くことが好きなのは、父親譲りかも知れない。書いて、性欲を発散しよう。

好孝は、縁側から立ち上がって湯呑みを流しで洗い、PCの前に戻った。そして「手記」の執筆を再開した。

翌日、好孝は授業を終えると、ショルダーバックを肩に掛けて、広々とした校庭を突っ切り、敷地の隅に建つ、掘立小屋のような陸上部の部室に向かった。

絵具で塗りつぶしたように、雲一つない真つ青な空と、容赦なく照り付ける真夏の太陽。滝壺に入ったように轟く蟬の鳴き声。そして、肌から吹き出る大量の汗。

部室のドアを開けると、中には一年下のマネージャー、岬久美（みさき・くみ）がいた。

「おつかれ」

好孝が声を掛けると、久美も笑顔で「こんにちは」と返事をした。

「何、やってるの？」机の前でPCに向かう久美に訊く。

「部員の個別練習メニュー、作っておけて、コーチに言われて」

世間的なコンセンサスとして、スポーツ競技の目的（ミッション）が「勝つこと」から「楽しむこと」にシフトして以降、逆説的にも人間の身体能力は飛躍的に向上した。いまだき、過酷な練習に「耐える」者はいない。過酷な練習は「楽しむ」ためのものだ。勝たなければならぬ義務など、どこにもない。みな、好きだからやっているのだ。好きなことのために努力し、がんばることを「苦勞」とは言わない。

オールド・タイプの世代では、多くの分野において、目的と手段が本末転倒を起こしていた。反面教師として、その教訓は、現代社会に強く活かされている。

好孝はカーテンで区切られた部室の隅で短パンとTシャツに着替えて、ジャージ姿の久美の向かいの椅子に腰を下ろし、ランニング・シューズに紐を通し始めた。

「成沢（なるさわ）来た？」久美に訊く。

「さつき、出て行きましたよ。網代山（あじろやま）まで走るって」

「追い掛ける」好孝の身体の中で、少しだけオスとしての血が騒ぐ。

「網代山って往復で、どのくらいあるんですか？」

久美がPCから手を放して、好孝を真正面から見た。

「24キロ。暑いし、タイム競うわけじゃないから、水飲みながら、チンタラ走るよ」

そこで、久美がいったん、視線を落とし、再び、好孝を真っ直ぐに見詰めた。

「わたし、ヨシタカさんに相談があるんです」

「何？」

「変なヒトって、思わない？」

久美の眼は真剣だった。

「今さら思わないよ。入学以来だろう？ 付き合い長いし」

「わたし、ヨシタカさんと繁殖したい」

久美が、その言葉を発した瞬間、双方の視線が万力で挟んだように固定された。好孝は、大きく唾をのみ込み言った。

「おれも久美ちゃんと繁殖したいと思うよ。久美ちゃんは、とても可愛いし、魅力的だから。でも、久美ちゃんが、おれに対して抱いている感情は、愛じゃなくて、恋だろう？」

「マリさんのことは知っています。でも、うちの親は、一夫多妻に寛容な人間なんです。それでも、ダメですか？」

久美は落ち着いた声で言った。

「愛は普遍だけど、恋は移ろう。特に、女の恋は、新しい恋に上書きされる。久美ちゃんには、ちゃんと、パートナー・シップを組むべき『ツイン・ソウル』が現れる。それまでは、貞節を守り、誰とも繁殖しない方がいい」

「その相手が『ツイン・ソウル』かどうか、というのは、どうすれば分かるの？」

「簡単だよ。ソファが一個あればいい。同じソファに座って、何も喋らず、何もせず、30分間過ごすんだ。ドキドキときめいて、性欲が刺激されたり、逆に、居心地が悪くなったりしたら、その人物は『本当の相手』じゃない。何も喋らず、何もしなくても、

一緒にいて居心地のいい、心が穏やかに温かくなる相手が、久美ちゃんの『ツイン・ソウル』だよ」

久美は黙って眼をつむっていた。しばらくして、久美が口を開いた。

「そういう相手が一人だけ、います」

「誰？」好孝は訊く。

「順平。……近所の幼馴染の中学生のショボい、バカ」

好孝は、シューズの紐の締め具合を確認すると、立ち上がって、明るく言った。

「久美ちゃんは、その順平君と、二十歳の時に結婚して、一緒に琉球に行く。今、見えた。おれ、親父がサイキックだったから、結構、分かるんだ。当たるよ」

部室のドアに手を掛けると、後ろから久美が「ありがとう、ヨシタカさん」と言った。好孝は、振り返り、久美に手を振ると、灼熱の日差しの下で、土を蹴った。

## 5：世界

10年前。2015年9月23日（水曜日）、午前6時28分。木星の軌道変化にともない地球の重力が一時的に変化、大規模な地殻変動と共に世界規模の洪水（津波）が発生し、日本と北米を残して、ヨーロッパ大陸を含めた多くの地域が完全に水没した。地球上の陸地の形状は大きく変化、かつて水没していた古代文明都市が海底から姿を現し、島状になった陸地に取り残された人々は、そうした古代文明都市への移住を始めた。かつて70億人を超えていた世界の総人口は、現在、4億8千万人まで減り、「国家」という枠組みは解体された。

日本という「クニ」も、アメリカという「クニ」も存在する。しかし、それは、かつての「国家」という概念ではなく、あくまでワン・ワールドの中の「州」に近いニュアンスとして受け止められている。ゆえに「軍」という概念も解体され、武力を有する組織は「警察（ポリス）」として認識されている。ワン・ワールドの中に悪者がはびこれば、警察が力を合わせて退治する。国と国が争う、という構図は生まれない。

ワン・ワールドのコンセプトは「平和と幸福を生み出す企業」。そのCEO（最終議決責任者）は「サイトウ・カズオ」という人物が務め、世界全体の政治的／経済的運営は「QAS」と呼ばれる自立型思考OS（AI）が統一的に行っている。

2015年以前の資本主義経済社会のスキームを作っていたのは、ユダヤ資本と華僑だったが、2015年以降は、日本古来の美意識、価値観が、世界全体で共有される新たなスキームとなった。

オールド・タイプの世界にも、善良で優秀な医師はたくさんいたが、医療制度／医療産業全体が集金システムとなつてしまい、西洋医学は悪しき知識／技術の集大成になつてしまつていた。医療の在り方は、ここ10年の間に急激に様変わりし、西洋医学と東洋医学が折衷された上で、日本発祥の「レイキ」や、イギリス発祥のスピリチュアル・ヒーリング、インドのアーユルヴェーダ等が統合的に体系化されつつある。

「死」という概念が実質上消えた世界にあつては、「宗教」という概念もまた消滅した。信仰を支払い、救済を購入する「店（ショップ）」であつた教会や寺はもはや存在せず、好孝の世代で「イエス」や「釈迦」の名を知る者は少ない。

逆に、現在では「シントー（神道）」が世界的なブームになつている。最終的なコンセプトが「ギブ（信仰）・アンド（引き換え）・テイク（救済）」になつてしまつたキリスト教や仏教と違い、「神道」の本質が信仰にはないことを、誰もが知つている。大自然を含めた八百万の神々を敬う行為は、先祖の御霊に祈りを捧げる心の表出と同じだ。

現生利益のために神社に人々が参拝していた頃の話は、シニカルなお笑い芸人のネタにされている。現代における「神社」のコンセプトは、大自然を含めた先祖を祀る「墓」であり「官司」「神主」「神官」という職種は「墓守」すなわち「ガーディアン」を意味する。

地球のヘソが日本国土で、日本国土のヘソが富士山であることは、もはや世界的な常識だが、日本国土が、八百万（やおよるず）の神々により、霊的に守護された土地であることも、ニュー・タイプにとっては周知の事実だ。史上、日本は数々の天災、人災に苦しめられて来たが、数千年に渡つて歴史が分断されていない「クニ」は、世界広しと言えども、他に例がない。

古代遺跡が海底から全貌を現したことにより、過去、5125年周期の大洪水によつて、三度、人類の歴史がリセットされたことが明らかになった。同時に、日本の歴史も大きく書き替えられた。

2015年に本殿が倒壊したことにより、有史以来、初めて出雲大社の「御神体」が明らかになった。ピラミッドの棺のように厳重に密閉された「箱」の中にあつた人骨の破片により、祀られていた「大國主神」が実在の人物だつたことが判明。同じく「箱」の中にあつた木書に刻まれた古代文字の解説により、「古事記」や「日本書紀」よりも、はるかに明瞭で筋道立つた古代日本の「正史」が教科書に掲載されるようになった。

日本国土が地球上に隆起したのは、約1万年前。3世代前の大洪水の時だつた。この国土に北と南からヒトが移り住み、土着狩猟民族である縄文人となつた。後、朝鮮半島

を經由し、稲作文化を持った弥生人が渡来。縄文人と弥生人のミックスにより、日本民族のルーツが作られ、縄文系の「大國主」が、日本国土に初めて「クニ」と呼びうる巨大な村を作る。この「クニ」を弥生系の卑弥呼が統治する邪馬台國に譲り、「大國主」は神として出雲大社に祀られた。

紀元前500年、新バビロニアとエジプトによる占領のために壊滅したイスラエル王國から逃げ延びたユダヤ12氏族の内の一部族（後に「秦氏」と呼ばれる）が、海路、日本に渡来。ユダヤ部族の長を「天照大神（アマテラスオオミカミ）」として祀るという名目で、伊勢神宮が建立され、皇室の祖となった。

少なくとも、これが、好孝が学校で学ぶ「日本史」である。

紀元前における古代日本民族が縄文人と弥生人とユダヤ人のミックス（混血）であることは、一般的なコンセンサスであり、DNA解析によれば、好孝は優勢・弥生型日本人、マリは優勢・縄文型日本人、好孝の父親は、前々回の大洪水（「ノアの箱舟」という物語で描かれた、紀元前3114年の重力変化）前の古代人の血を引く、優勢・シユメールユダヤ型日本人だった。

なお、かつて北海道と呼ばれていた地域は「アイヌ州」、沖縄と呼ばれていた地域は「琉球州」として、行政的に独立し、それぞれ独自の靈性文化を發展させている。

巨大なカタストロフを契機に、かつて社会のインフラとして位置付けられていた、洗練されたデジタル先端技術の脆弱さが露呈、PCもインターネットも現存してはいたが、スマートフォンを使用する人間は姿を消し、通常の携帯電話と固定電話の使用率が半々となった。音楽を愛好する者は、LPやCDを買い、映画は映画館で鑑賞する、という風潮が戻った。SNSは、政府や企業等の公共的連絡網として使われ、パーソナルなレベルでは、親族付き合い、近所付き合いが重視されて「ヴァーチャルにはなくリアルに繋がる」が、社会の合言葉になった。

最悪の場合は行政が介入し、必ず、誰もが、どこかしらの「ユニット（靈的共同体／大家族）に吸収されるようになったため、孤児もホームレスも独居老人も消えた。本人たちが強く母子家庭を希望する場合以外は、シングルで子どもを育てる母親もいない。老人ホームは「介護施設」ではなく、ターミナルを迎えるお年寄りたちの寄合所、コミュニティとして機能している。

現代の日本に、高層ビルや高層マンションが林立するような都市はない。庶民には木造平屋建築が好まれるようになり、高度成長期以前、昭和30年代の日本の原風景が再現されつつあった。

好孝とマリが生きていたのは、そのような歴史の一時期だった。

春馬。日本は八百万の神々によって靈的に守護されたクニだから、靈的な働き掛けも強い。かつて、日本にだけ特別に新宗教、新興宗教と呼ばれる団体が乱立したのは、そのせいだ。ただ、そうした団体のほとんどは、中途半端にチャネリングされた人、大して大きくはない靈にチャネリングされた人、もしくは、強く、大きくチャネリングされたにも関わらず、「靈媒」としての人間の器(うつわ)が小さかったために、後に、道を踏み外して行った人たちが興したものだ。だから、考察には値しない。

日本におけるスピリチュアルの歴史の中で、パパが唯一、君に伝えておきたいのは、パパのパパとも深い関わりのある「出口なお」という女性についてだ。

\*

出口なおさんについて語る前に、念を押しておこう。

春馬。今でも、お年寄りの中には混同している人が結構、たくさんいるのだけど「聖書」において「神」と呼ばれたものと、日本の「神々」は、まったく違う。「聖書」に登場する「全知全能の創造主」は、マンガやゲームに出て来る主人公と同じ、単なる架空のキャラクターだけれども、日本における「神々」とは「靈」のことであり、「靈」とは「眼には見えない人間」を意味する。

肉体を持った人間と、肉体を持たない人間では、それぞれ、持つ力も役割も違うし、立場(ヒエラルキー)的には、人間界より靈界が上位に位置するけれども、肉体を持たない靈も万能ではないし、人間界と同じで、靈界にも「唯一絶対」は存在しない。肉体を持った人間の中に、徳の優れた、懐(ふところ)の深い人もいれば、薄っぺらな人格の墮落した人もいるように、実社会に対して影響力を有する大物もいれば、何の発言力もない小者もいるように、靈界にも様々な(眼には見えない)人々がいる。そして、人間社会に「クニ」や「会社」という形で様々なコミュニティがあるように、靈界にも様々なフィールド(社会)がある。「眼には見えない人たち」は国や地域を問わず存在しているけれども、日本の八百万の神々が、他国の靈と比べて特殊な点は(血脈や鈿脈と同義での)「靈脈」が数千年に渡って途絶えておらず、それゆえに、歴史の中で巨大な財を築き、富を蓄え続けて来た財閥と同じで、靈力が強く、由緒ある巨大な御霊が数多く存在することだ。

春馬のおじいちゃんに憑依した「大国主神(おおくにぬしかみ)」も、そうした巨大な御霊の一つだけれど、出口なおさんに憑依した「国之常立神(くにのこたちのかみ)」は、「大国主神」よりも、はるか古代、始源から日本に存在していた御霊だ。

メジャーな神社に祀られている「大国主神」や「スサノオ」「ニギノミコト」「タケミカヅチ」と言った御霊と違い「国之常立神(くにのこたちのかみ)」には、クリアな人格が設定されていない。これは、パパの個人的な推測だけれども、「国之常立神(くに

のとこたちのかみ)」は、第二世代前の大洪水から生き残った、古代シユメール人の霊なのではないかと思う。

\*

出口なおさんは、1837年1月22日(天保7年12月16日)、大工の父・桐村五郎三郎と母・すみの長女として、現在の京都府・福知山市に生まれた。

江戸時代・領主の階級だった桐村家だけど、なおさんのお父さんが放蕩親父だったことで一家は没落、なおさんは、まだ小さい時に下女奉公(米屋や呉服屋の下働き)に出される。それでも、偉い人に「孝行娘」として表彰されるほど、真面目に働き、どの家々でも信頼された。彼女は、小さな時から信仰心が篤く、シャーマン的な素養は元々、あったらしい。

17歳の時に、同じ京都の「出口ゆり」という叔母さんの強い要望により、養女となつて、出口家を相続、18歳で宮大工の四方豊介さんと結婚。豊介さんは出口家の婿養子となり「出口政五郎」を襲名した。

政五郎さんは、弟子たちに慕われる名大工だったけれども、楽天家で浪費家という欠点があり、資産家だった出口家は数年で没落、なおさんは出稼ぎや内職で家計を支えた。

11人産んだ子どもの内、3人は幼くして亡くなった。残った3男5女も、全員は養うことが出来ず、10歳を前に、ほとんどを奉公に出した。なおさんが52歳の時に、政五郎さんが死亡。続いて、嫁いだ長女と三女が発狂、養女に出した先の家でも、殺人、強盗、偽札作りによって終身刑になった者が一人ずつ、自殺者が5人出て、長男は自殺未遂の後に失踪、次男は戦死、次女は駆け落ち、なおさんは、子どもたちを巡っても苦労を重ね、この頃のことを「地獄の釜の焦げ起こし」と語つたと言われている。

元々、真面目な性格だった出口なおさんは、こうした類のない苦労を重ねる過程で、己を捨て、人間的に成長して行つたのだろう。

1892年(明治25年)1月30日(辰年旧正月元旦)、56歳の時、なおさんは『良の金神、元の国常立尊』と宣言する神と出会う霊夢を見た。

「良の金神(うしとらのこんじん)」とは、日本に古くから伝わる陰陽道の言葉。「金神」とは「崇(た)り神」のことで「良(うしとら)」とは東北を指す。東北は、もつとも恐れられている「鬼門(きもん)」の方位。したがって、「良の金神」とは数ある金神の中でも、もつとも恐ろしい鬼門の方位にわだかまる「猛悪の崇り神」を意味していた。

2月3日、「良の金神」が、出口なおさんに本格的に帰神(神懸かり)する。

憑依状態になった、なおさんは、まず13日間の絶食と75日間の寝ずの水行を行う。

同居していた四女・龍と五女・すみのうち、すみにだけ村の各場所に塩をまかせる等の用事を頼んだ。こうした奇行は周囲から「狸か狐がついた」と思われていた。ちょうど、

その頃、綾部でたびたび原因不明の火事が起こり、当時、なおさんは憑依状態で、

「よき目ざましもあるぞよ。また悪しき目ざましもあるから、世界のことを見て改心いたされよ。いまのうちに改心いたさねば、どこに飛び火がいたそうも知れんぞよ」

……と大声で叫び回っていたため、放火の容疑で留置場に入れられてしまった。釈放された後も、長女の夫によって自宅の座敷牢に40日間監禁される。入牢中になおさんは、神に「声を出さないで」と頼んだところ、神は「ならば筆を執り、神の言葉を書くがよい」と告げた。なおさんは、落ちていた釘で神（霊）の言葉を壁に刻むようになり、日が暮れて、真つ暗になっても書き続けた。彼女は文盲（文字の読み書きが出来ない）だったのだけど、81歳で亡くなるまでの27年間、憑依現象による自動書記で書き残した「神の言葉」御筆先（おふでさき）は、半紙20万枚分になった。

ただ、彼女が書く文字は、句読点のないひらがなと漢数字だけで記されたため、これを、誰でも判読出来るように、後に関係者が編纂したのが『大本神諭（おおもとしんゆ）』だ。

出口なおさんは、この「神憑り」を起こした後、61歳の時、上田喜三郎という人物と出会い、共に「大本（おおもと）」という巨大な宗教組織を作り上げて行くのだけど、そのことについて、もし、知りたかったら、自分で調べて欲しい。

なぜ「国常立尊」は、凶悪な祟り神として、なおさんに憑依したのか？ 喜三郎（後の王仁三郎）とは、どんな人物だったのか？ そして、宗教組織「大本」は、歴史の波の中で、いかなる命運を辿るのか？ 出口なおさんのドラマは、むしろ、ここから始まると言ってもいい。

パパが、ここに「出口なお」という女性について書いたのは、パパのパパが、この、出口なおさんに、深いシンパシーを抱いていたからだ。

パパのパパも、魂が万力で締め上げられ、破裂／消滅してしまうほどの内面的拷問を経験した人間だけでも（身体を拷問された方が、余程マシと言っていた）、シンパシーを抱いていた理由は、何よりも、なおさんが、自分と同じ憑依現象による自動書記を経験した「預言者」だったからだよ。

『大本神諭』は、日清戦争、関東大震災、太平洋戦争の予言を的中させた。さらに大きな終末論的予言が含まれ、世の立て直しを説いていた。春馬のおじいちゃんも、本質的には、同じ内容を本に書き、どちらの「予言」も現実になった。

春馬のおじいちゃんが、困惑、葛藤しながらも、自分の「予言」について、ある種の確証を持っていたのは、この『大本神諭』に連なる『日月神事（ひつきしんじ）』（太平洋戦争中、岡本天明という人が、出口なおと同じ「国常立尊」に憑依され、自動書記で書き残した書物）という「預言書」の中でも、やはり、終末的天変地異の予言があり、そこに「天地のビックリ箱が開き、日本のお土（つち）が上がる、外国はお土が下がる」と書いてあったからだ。

そして、パパのパパの「予言」は的中し、あの日、日本国土は隆起し、諸外国は水没した。

大洪水が来た時、パパは、まだ7歳だったから、オールド・タイプの社会のことを詳しくは知らない。普通に小学校に通い、ゲームやアニメに夢中な、ただの足の速い子どもだった。今の社会と昔の社会、どちらがいいかは、一概に言えない。

今の社会の方が、圧倒的に平和で幸福であることは確かだ。恐らく、春馬が生きるこの物質世界は、人類の歴史上、もつとも「天国」に近い。

でも、かつて人間は「どこか」に向かって進んでいた。その「どこか」は間違った場所だったかも知れないけれど、ともかくにも進んではいた。ここから先、人類に「目指すべき場所」は、ない。もう、ゴールに辿り着いてしまったんだ。それが、少しだけ、パパには寂しいことのように思える。

良くも悪しくも、現代社会を表現しているのは、ワン・ワールドの現在のCEO（最終議決責任者）である「サイトウ・カズオ」が就任演説で発したミッション・ステートメントの言葉だろう。

「かつて、戦国時代、織田信長は宣教師に地球儀を見せられて、初めて自分が生き、戦う世界の狭さを知った。霊界という、パラレル・ワールドの存在を認めた我々に『鎖国』の道は、残されていない」

## 7..挨拶

人間を攻撃するウイルスが地球上から消えた現代、病気Ⅱ気の本質が「ストレス」に起因することが解明され、「ストレス型疾病」の典型である認知症を発症する老人も、ほとんどいなくなった。マリの祖母「城谷智子（しろたに・ともこ）」もまた、82歳ながら頭脳明晰で足腰も頑健に機能していた。

好孝は両親をすでに亡くしており、遺族の残した資産は、筑波大学付属理化学研究所（茨城エリア）に勤務する兄と共有している。マリも両親を早くに亡くしていたが、「育ての親」である祖母・智子は長野エリア・佐久で独り暮らしを堪能、満喫していた。

2025年8月7日、好孝とマリは、智子が暮らす長屋（ながや）の一部屋を訪れた。傍らに清流があり、田畑の広がる、緑の多い土地柄だった。

「わたしは古い人間だから霊力がないし、『ツイン・ソウル』というものが、どういう感

覚なのかも分からない。時代が変わったから、マリだけを愛して欲しいとも言わない。でも、好孝さん、死ぬまでマリを一番好きでいてくれるかい？」

智子は言った。

「おばあさま。美しい女性は確かに心の栄養ですし、他の女性と恋に落ちることもあるだろうと思います。でも、僕たちが『ツイン・ソウル』であることは、僕たちにとって自明のことです。男女を問わず、これから先、大切な『ご縁』は現れるでしょうし、同居人も増えて行くかも知れませんが、身体があってもなくても、僕たちは一つです」

好孝が答え、マリが後を継いだ。

「おばあちゃん、ここに麦茶のグラスがあるでしょ？ それは、おばあちゃんにとって自明のことでしょ？ わたしとヨシタカが『ツイン・ソウル』であることは、わたしたちニュー・タイプにとって、ここに麦茶のグラスがあることと同じくらい自明のことなの」

マリの祖母は、最近、茶色く染めたという髪を軽く揺らし、笑った。

「分かったよ。最近の若い子は、入籍もしないし、結婚式もしないから、何だか寂しい気もするけど、まあ、仲良くやりなさい。こうして、ちゃんと二人揃って挨拶に来てくれただけでも、好孝さんが礼儀正しい人間だということは分かる。適齢期が来たら、子どもは早く産んだ方がいい。マリ、良い母親になりなさい。わたしが言うのも、何だけれどもね」

智子が言い終わると、好孝は畳の床に膝と手を付き、頭を下げた。

「ありがとうございます。マリさんを幸せにするために、全力を尽くします」

「好孝さん、頭を上げて。お祝いに、一緒にスイカを食べましょう」

智子が清流で冷やしていたスイカは、近所で採れたもので、とても大きく、緑と黒の色が鮮やかだった。包丁で真つ二つに割ったスイカに、スプーンを突っ込み、好孝はすくって食べた。水気が多く、とても甘い。

「小さい時、こうやってスイカを食べるのが夢だったんです」

「良かったわね、夢が叶って」智子が優しく微笑む。そして、続けた。

「好孝さん、血統には女系と男系があるから、どちらがいいとは言えないけれど、子どもを持ったら、父親か母親、どちらが家庭のリーダーになるかは、はっきり決めておきなさい。リーダーが良いリーダーであり、指示系統がはっきりしていれば、家庭はうまく回るから。わたしは夫を『殿』と持ち上げ、夫は家庭の良きリーダーだった。だから、わたしは子育てでも大した苦労はしなかった」

「うちの一族は女系なので、我が家はマリさんがリーダーです」好孝が言う。

「大丈夫よ、おばあちゃん。ヨシタカのことには、もう、今からちゃんと躰（しつ）けているから」

「出来るだけマリさんの手を煩わせないように、精一杯、努力する所存でございます」

好孝がおどけて言うと、智子がマリに向けて「おじいちゃんに聞かれたら、あなた、引つ叩かれるわよ」と真顔で言った。マリが宙に視線を向ける。

「おじいちゃんも、お父さんも、お母さんも来てる。ずっと、話、聞いているよ。あつちでも、両家のご先祖様たちが、みんな、祝福、守護してくれているって。お腹の春馬も含めて」

「ニュー・タイプとやらは、便利ねえ……」

智子は、そう言いながら着物の懐からご祝儀を出し、二人に渡した。

「足腰が立たなくなったら、そちらに行くよ」

「もちろん」

好孝とマリは、声を揃えて返事をした。

真夏日に気温が40度を超える日もあったが、地球全体の寒冷化は確実に進行しており、日本の通年平均気温は10年前に比べて7度、下がった。「化石燃料を使えば使うほど二酸化炭素が大気中に増加、結果として地球が温暖化する」というロジックが、「温暖化防止」という巨大なビジネス・モデルのためのねつ造であることは、21世紀初頭、すでに有識者の常識になっていたが、地球が氷河期に移行しつつあることが世界的なコンセンサス（共通認識）となったのは、つい、最近のことだ。

温暖化は防止出来るが、寒冷化は防止出来ない。ただ、資本主義経済社会が「経済的に潤うなら、それでよし」とする悪癖を發揮しなければ、もっと早く、対策を講じておくことは可能だった。

旧世代を形成していたのは「金（かね）」だ。資本主義経済社会は、すべてが金で繋がり、金で動き、金で作られていた。

金（マネー）は、元々は実体を持った金（ゴールド）だった。ゴールドは物理的実体だから思念で増やしたり、減らしたりすることは出来ない。けれど、マネーとは、すなわち、紙に書いた数字、デジタル記号でしかない仮想概念である。1999年に第一作が公開された映画『マトリックス』と同じで、仮想概念（ヴァーチャル・リアリティー）は、その世界に参加（所属）するものが「真実だ」と信じれば実体となるが、「仮想だ」と見なせば嘘になる。

旧世代でマネーという仮想概念が実体として機能していたのは、それが社会全体の「ゲーム」の基本的大前提（ベーシック・ルール）だったからだ。そして、旧世代においては、世界全人類が選択の余地なく、洗脳され、その「ゲーム」に参加を余儀なくされていた。

ワン・ワールドのCEO「サイトウ・カズオ」が就任後、最初に着手したのは、その「ゲーム」を終わらせることだった。自立型思考OS（AI）「QAS」と連携することにより、彼が具体的に実行したのは、すべての経済活動から、利子（利鞘）を撤廃することだった。

旧世代経済の諸悪の根源は、社会の中に銀行という制度が誕生し、利子（利鞘）という商品を売り始めたことに由来する。このことにより、すべての経済活動は銀行のコントロール下に入った。具体的には、すべての「銀行」をコントロール下に置くことの出来る、ごく一握りの「バンカー」が世界のすべてを掌握出来るシステムが、この地球上に構築された。

ニュー・タイプの社会に移行して以降、銀行は、利子（利鞘）を販売する企業ではなく、あくまで経済活動を中継するハブとなった。この世界には税も値段も存在しない。言うなれば「募金制経済」（思いやり主義経済／ジェントル・エコノミーとも呼ばれる）が構築された。それは、実質的な意味合いにおいて、政府が国民（クニの民）を養う社会ではなく、国民が政府を養う社会の到来だった。

国民（クニの民）に税を収める義務はない。あくまで国民が出資し、政府にクニのコ

ントロール（運営）を依頼する。

公共事業も募金で賄われているし、企業が必要な資本は、すべてクラウド・ファンディングの手法によって賄われる。現生利益を求めない社会においては、それで経済は、何の滞りもなく循環した。「欲の皮を突っ張れば、死んだ後に苦しむ」ということを、誰もが理解していたからだ。

旧世代において、人生の目的とは、一言で言えば「金を稼ぐこと」だった。けれど、その目的（ゴール）を一度、見失った人間は、やがて、職業選択において「自分がやりたいことは何か？ 自分がすべきことは何か？」を考えるようになった。そして、かつて「金が欲しい」が人類の根底に流れる基本的欲望だったことに代わり、人類の根底に流れる基本的欲望は「困っている人を助けたい」に変化した。いわば、「困っている人を助ける」ことが現代社会における世界的流行（ムーブメント）であると言ってもいい。

**今では、困っている人がいれば、誰もが、こぞって助けようとする。そう、かつて、誰もが、こぞって金を手にしたがったように。**

ただ、人間は弱い生き物でもある。同じ過ちを二度と繰り返さないために、過去、人間の経済活動が、どのようにして道を踏み外して行ったのかを、好孝は高校の授業で学んだ。以下は、好孝が高校で使う「経済原理」の教科書からの抜粋である。

\*

#### ■二種類の人々

旧世代の人たちは、自分たちが属する資本主義経済社会がおかしいことを自覚してはいましたが、その先の青写真を描くことが出来ずにいました。なぜ、彼ら、彼女らが「経済の最終形態としての共同体のあり方」をイメージすることが出来なかったかと言えば、旧世代における「経済」というシステム自体が、人間の理解を超えた、眼には見えない巨大なモンスターになってしまっていたからです。

でも、人間社会のもっとも根源的な基盤（インフラ）として経済を考えた場合、実は経済というシステムはともシンプルな構造で出来ていたのです。ただ、その構造を隠蔽するシステムが長きに渡り、世間を洗脳していたがために、旧世代の人たちは、金に生き、金に苦しんでいました。

資本主義経済社会においては、それこそ無限とも言える様々な経済理論が考えられ、試されて来ました。しかし、資本主義の本質とは、黒と白の駒で行う「オセロ・ゲーム」でしかなかったのです。

旧世代の経済社会には、二種類の人間しかいませんでした。それは、

「お金を作ることができる人」と「お金を作ることができない人」

です。旧世代世界人口の99%は「お金を作ることができない人」でした。「お金を作ることができない」という意味では、商店街の八百屋さんも、マイクロソフト社の創業者であるビル・ゲイツも、個人資産220億ドル（2兆2000億円）を保有していた投資家・ジョージ・ソロスも同じカテゴリーにいる人間でした。「お金を作ることができない人」は、運用資金の多寡（たか／多い、少ない）に関わらず、お金をあつちにやったり、こつちにやったり、やりくりしてお金を増やすしかありません。

「お金を作ることができない人」とよつての経済というシステムのイメージは、例えば、こんな感じでした。

資本主義経済世界全体を一つの大きな粘土の塊に見立てたとします。この粘土をちぎつて、あつちにくつつけ、こつちにくつつけ、しているのが経済。すごく大きな塊をちぎつて、別の場所にくつつける人もいるし、ほんの小さな塊をちぎつて、自分の塊にくつつける人もいますが、粘土全体の塊の大きさは変わりません。でも、実は、打ち出の小槌のように、何もないところから粘土の塊を作りだし、自分のものにしてしまうことのできる人がいました。それが、「お金を作ることができる人」です。結論から先に言えば、「何もないところから、お金を作ることができる人たち」とは、すなわち銀行家Ⅱバンカーです。

#### ■ 「信用創造」とは何か？

「粘土の塊」は物質ですから、材料がないと作れません。でも、「お金」と言うのは、言ってみればただの数字ですから、極端な話、紙きれに「千円」と書いて、その紙切れが信用を得て流通さえすれば、紙と鉛筆で、いくらでも大きなお金を作り出すことが可能なのです。このメカニズムが「信用創造」という行為（マジックのカラクリ）です。そして、旧世代世界で、この「信用創造（お金を作る）」という行為が可能なのはバンカーだけでした。

過去、人間が持っていた一般的なイメージだと、この「お金を作る」という作業は、政府との相談／合意の上で中央銀行（日本であれば日銀、アメリカであればFRBⅡ連邦準備制度）が独占的に行っている、と考えられていました。でも、実は中央銀行は政府とは関係なく、独自で「お金を作る」ことができる権利を持っていました。そして、中央銀行とは株式会社であり、その株主は一般の民間銀行です。つまり、一般の民間銀行家Ⅱバンカーは原理的には、自由に好きなだけ「お金を作る」ことができるのです。

「お金を自由に好きなだけ作ることができる」と言われると、直感的に「インフレ／デフレ」という言葉（概念）が浮かぶと思います。でも、見方を変えれば、バンカーは世界をインフレにするか、デフレにするかのジャッジ／コントロールさえも出来る、という事です。

例えば、A国とB国との間に戦争を起こすことができれば、A国にもB国にも戦費が必要になります。バンカーは自由にお金を作ることができるわけですから、A国にもB国にも、お金（戦費）を供給することが可能です。そして、この戦費をコントロールすることによって、A国を勝たせることも、B国を勝たせることもできます。こうしたコントロールを行うことによって、バンカーは世界経済、世界の有りようをデザインすることができたわけです。

#### ■銀行のトリック

経済構造（バンカー・ネットワーク）が戦争を引き起こすことは漠然とイメージしやすいと思いますが、みなさんは、そもそも、かつての「バンカー（銀行家）」とはどんな仕事をしていた人たちか、ご存知ですか？

銀行の起源は金細工商だったと言われています。

貨幣経済が発達する前、お金とはすなわち、文字通り金（きん／ゴールド）でした。そうすると、お金持ちの人は、ものすごく大量の物質としての金を管理しなくてはなりません。それは不便だし、心配なので、1650年代、イギリスのお金持ちはロンドンで、一番頑丈な金庫を持つゴールドスミスという金細工商に金を預けることにしました。そして、ゴールドスミスは預かった金の代わりに、金の所有者に「預かり証」を手渡ししました。しばらくしてゴールドスミスは自分に預けられている金が常に一定量を下回らないことに気付きました。これは、支払いに用いられた金を受け取った業者がすぐに、また預けに来ることが理由でした。また、中にはキリのいい単位で金を預け、その預り証をそのまま取引に用いる金所有者も現れました。

ゴールドスミスは、預けられた金を運用しても預金支払い不能にならないことを知り、貸し出し運用を開始しました。これが銀行のはじまりであり、この過程で生まれた預り証が、現代の紙幣の起源です。紙幣（預り証）は金の預金証書であり、価値の裏づけがなされているから価値を持つことができたわけです。

でも、よく考えてみて下さい。もし、金所有者にバレなければ、金庫の中に金があってもなくても、この「預かり証」は、いくらでも作って流通、やり取りすることが可能なわけです。そして、もし、金庫の中身が空っぽであることがバレて、取り付け騒ぎが起ったとしても、銀行家同士がタッグを組んで、実体としての金を貸し借りすれば、金所有者をだまし続けることは可能です。逆に、この貸し借りネットワークから村八分

にしてしまえば、ある特定の銀行を意図的に潰したり、吸収合併することも可能になります。

かつて、一般の銀行業務は、このようにイメージされていました。

個人や企業が銀行にお金を預ける↓集めたお金を銀行が別の人に貸す↓利子を付けて、そのお金を銀行が回収する↓増えたお金を、銀行がまた、別の人に貸す。

この預金業務と貸出業務が、過去の一般的な銀行の仕事。

でも、先ほども書きましたように、金庫の中に金があってもなくても、銀行はお金のやりとりができるのです。

旧世代の銀行は、以下のような仕組みで動いていました。

市民が銀行にお金を預けます。その金額は通帳に記入されます。その金額は実体を持った数字（紙幣の預金証書）です。ところが、市民が銀行からお金を借りた時に通帳に記載される数字は、架空の数字です。つまり、市民が銀行からお金を借りようが、一億円借りようが、銀行からお金は減らないのです。そして、原理的には、銀行はいくらでも金を貸し出し、利子を付けて回収できます。だから、回収できなくても本当は困らない。増えることはあっても、減ることはない。これが「信用創造」という銀行の本業のカラクリです。実体を持ったお金（価値の裏付けのあるお金）のやりとりをしている金融機関は、サラ金や闇金と呼ばれた非正規、非合法組織だけでした。

私たちが銀行に紙幣を預ければ、銀行の金庫には「価値」が蓄積されます。でも、銀行が貸し出すお金は価値の裏付けのない、たんなる数字ですから、私たちが銀行からお金を借りても、銀行の金庫から「価値」は減らない。

過去、銀行も破綻（はたん）したではないか、と思われるかも知れません。でも、大不況が来ようが、バブルが弾けようが、どのバンクを潰し、どのバンクを残すか、というジャッジをすることは、ワールド・スケールの権力を持ったバンカーにとっては造作もないことだったのです。

#### ■世界を支配する者

こうした「信用創造」⇨「お金を生み出す仕組み」をコントロールし、取りまとめているのが、各国の中央銀行であり、そうした中央銀行の総本山があるのがスイスでした。

なぜ、中央銀行のさらに中枢がスイスになったかと言うと、過去、まだインターネッ

トなどなかった時代に、ヨーロッパの地理的中心部にスイスが位置していたからです。中世、ヨーロッパ諸国が十字軍遠征の際に、各王国の騎士が家族に給与を届けるためのハブがスイスでした。

スイスが永世中立国として存在していたのは、日本のような平和憲法があったからではありません。バンカーが世界経済を支配下におくためには、各国に中央銀行を設置するのが、もつとも手っ取り早い手段であり、そうした世界各国の中央銀行をコントロールするためには、スイスを保守、保全することがバンカーにとって、必要不可欠だったからです。経済が世界を根底で規定していた以上、バンカーには誰も逆らうことはできませんでした。例え、一国の王であったとしても。

過去、アメリカの中央銀行が「セントラル・バンク」ではなく「FRB」連邦準備制度」という分かり難いタイトルであったのは、歴代の大統領がバンカーの支配に対抗し、中央銀行の設置に反対したにも関わらず、バンカーの手によってプロセスをやむやみしたまま作り出された「経済コントロール・システム」が「FRB (Federal Reserve Board)」だからです。

過去、起きた闇に包まれたあまたの事件、ケネディ大統領が暗殺されたことも、バチカン銀行関連の連鎖的暗殺も、世界貿易センタービルにボーイング767が突っ込んだことも、その事件をきっかけとしてアメリカが、根拠不明なままイラクへ侵攻したことも、世間の表舞台には決して現れることのないバンカーの指示／圧力によるものでした。高度情報化社会の中で、そうした謎が謎のまま保存されるためには、包括的で普遍的な圧力を国家権力に対して掛けることのできる、さらなる権力が必要です。そうした隠蔽が可能な、国家権力のさらに上部に位置する組織は、強大な力を有する経済ネットワークだけでした。

金（マネー）の力によって、大衆には知り得ない形で世界情勢をコントロールしていた経済ネットワークが、かつて存在していたことは事実です。なぜなら旧世界においては「権力＝財力」を意味していたからです。

みなさんにはイメージすることが難しいかも知れませんが、資本主義経済社会とは、「利他」を考えることなく、他者を従属させ、「我欲」を増大させることによって発展するシステムだったのです。

## ■ 結論

「経済」の本質とは「何かと何かを交換すること」にあります。「お金」がなくても、何かと何かを交換することは出来ず。

もちろん「お金」はとても大事です。「お金」を、ないがしろにしてはいけません。けれど、「お金がないと何も出来ない」と考えるのは、間違っています。本当に大事なのは「お金」ではなく「ご縁」です。「お金」がなくても、「ご縁」があれば、人と人が助け合い、支え合って生きて行くことが出来ます。どうか、皆さんも、これから学校を卒業し、大人に成長して行く過程で大事な「ご縁」を、数多く育んで下さい。

9 : ガート

智子に結婚の挨拶を済ませた帰り道、好孝とマリは佐久の駅前の大きな百貨店3階にいた。

「生活必需品以外、欲しいものが特にない」という心理状況を、好孝は時に寂しく感じることがある。物欲を程よく楽しむことの出来るマリが、羨ましい。そう言うと、マリは、

「女性が自分を装飾したいという気持ちは大昔からあったし、それは、これからも変わらないと思う」

と言った。最近のファッション・トレンドは男女問わず和装であり、マリが選んでいるのも、浴衣(ゆかた)だ。

「浴衣ってね、下着の上に直に着るとボディ・ラインが崩れる。浴衣には浴衣専用の下着があるんだよ。ヨシタカ、知ってた？」

「知らないよ、そんなこと。どーでもいい」

好孝は笑って答えたが、マリはもはや聞いてはおらず、ハンガーに掛かる浴衣を真剣に選んでいる。日本には241種、5116紋以上の家紋が存在するが、そうした「家紋」を赤や青の、はっきりとした色合いの布地にパターン・プリントした浴衣が、いまどきのハヤリ。マリは試着を数度、繰り返しした後、最終的に、ピンク色の花菱紋が大きくレイアウトされた『スナイデル』の真っ白な浴衣を選んだ。

「いくら？」好孝が訊く。

「最低価格が1万2千円。でも、わたし『スナイデル』が好きで応援しているから、1万5千円払う」

「いいんじゃない」

現金で会計を済ませると、二人は百貨店の最上階にある「フリー・プライス」のフレンチ・レストランに入った。「フリー・プライス」の店は、最低金額が設定されていない。つまり、極端な話、無銭飲食をしても、とがめられることはないが、逆に、一皿の料理に百万円支払う者もいる。余程、腕に自信のある料理人以外「フリー・プライス」の店を出さない。二人は店の前のメニューを見ながら、ランチのコースがまずかったら10円、美味しかったら千円、ものすごく美味しかったら三千円、一人ずつ支払おうと相談し、店内に入った。

\*

長野から奥多摩に戻る新幹線の中で、二人は並んで座り手を固く繋いでいた。好孝が窓際に、マリが通路側に座っている。一本のペットボトルのお茶を、時折、交互に、口に運ぶ。窓の外には、暮れかけた日差しの下に濃い緑の風景が広がり、車中は空調が効き、心地よい気温に保たれている。

「9月になったら、荒井さんのところでバイトしながら研修する」

好孝は言う。

「ツバメ苑でってこと？」

マリが訊く。

「うん。荒井さんはリアルに過去生の母親だ。彼女も、もう82歳だから。将来的には、後を継いで欲しいと言っていたよ」

「現場から入るんでしょう？」

「今は、現場も事務職もないよ。担当するお年寄りを決めて、そのお年寄りたちのことは、ケアからマネジメントまで全部、担当者がやるんだ」

「それが、ヨシタカがやりたい仕事なのね？」

「やりたい、と言うか、それが正しい『氣の流れ』だと感じる。40代で亡くなった荒井さんの旦那さんも、出口なおさんの旦那さんと同じ宮大工だったし、彼女は若い頃、

意図せず大本系の組織と関わっていたこともある。おれの親父も出口なおさんと同じ経験をしているし、荒井さんも、おれのばあちゃんの母親も、明らかに靈的にコネクトされて『天命』を背負い、人助けの仕事をしている。強い、女系の靈脈を感じる。たぶん、おれは、その一連のミッションを繋ぎ、継がなければならないのだと思う。導かれているんだよ、靈的に」

「ヨシタカは『氣の流れ』が読めていいよね。わたしは『陰陽』は見えるけど、『氣』は読めないから」

ニュー・タイプの中でも氣の読める人間は、まず、判断に迷うということがない。

一般的な人間は「どちらが得か、損か」「どちらが良いか、悪いか」「どちらが正しいか、間違っているか」という（理性的）判断基準で選択をするが、氣の読める人間は、AとBという選択肢があった場合「どちらが、心地よく、ナチュラルか？」という（本能的）判断の仕方をする。意図、作為を解き、直感に従って判断し、行動して行くと、人は自然と「氣の流れ」に乗ることが出来るようになる。「氣の流れ」に乗っていれば、例え、それが、どのような場所か事前に知ることは出来なくても、自ずと「然るべき場所」に辿り着く。

「氣の流れ」とは、いわば「眼には見えない川」のようなものだ。

人は皆、「人生（運命）」という川に浮いたイカダに乗っている。多くの人は、足元だけを見てイカダを漕いでいるから、途中で岩にぶつかったり、岸に乗り上げ座礁する。川の流れの遙か先まで見据えてイカダを漕いでいけば、必ず最後には大海へと辿り着くことが出来る。例え、その途中に、どれほどの激流があるうとも。

好孝は中学2年生の一時期、その「激流」を経験した。まだ、マリに出会う前のことだ。ある日を境に悪夢にうなされる日が続き、邪悪な妄想に頭を支配された。性格が陰悪になり、同級生に暴力をふるったこともある。歪んだ性衝動に苦しみ、ペット・シヨップから、その目的のためだけに購入した小動物を意味なく殺したこともあった。

だが、その「激流」を過ぎた後、憑き物が落ちた（悪霊が去った）ように心身がスッキリと清められた感覚があり、靈的に覚醒した。

窓の外では、大きな湖の水面で夕日がオレンジ色に輝いていた。

「マリは、どうするんだ？ 今後」好孝は訊く。

「身体が重くなるまでは、学校に通おうと思う。うーん、3ヶ月か、年内くらいまでは。まだ、勉強したいこともあるし、ヨシコとかマヨとかヒロミとも、まだ遊びたいし」

「クラブ？」好孝は苦笑しながら言った。

「うん」

「吉祥寺？」

「うん」

マリも照れくさそうに笑う。

「踊るのは、もう無理かも知れないけど、好きなんだよね。クラブの、あの空気感というか一体感みたいなのが」

21世紀初頭に流行した、EDM（エレクトロニック・ダンス・ミュージック）とフアンクに代わり、現在ではグランジ・ロックとトランスを融合した曲が、ミュージック・シーンの主流を占める。アイドルが繁殖欲求の対象でしかない、と見なされるようになって以降、男女共に、アイドル文化は衰退した。

死生観と恋愛観が根底から崩れた現代社会にあつては、物語を構築することが原理的に不可能となり、新しい小説や映画が生産されることはなくなった。究極的には、誰もが肉体の死を望む世界で危機は描けないし、「恋≡性欲」と見なされる社会で、ドラマチックなロマンを描くことは出来ない。

原始部族は、物語を生産しない。彼らはいくまで伝承を語り継ぐだけだ。原始部族にとって最大のエンタテインメントは「歌と踊り」。シャーマニズムが復活し、無駄な抽象概念、不要な「言葉（コトバ）」が消滅した現代社会は、洗練された原始社会でもあった。

「おれも働き始めるし、マリも子どもを産んだら、当分は遊べなくなる。今の内に、遊んでおこう」

好孝が言うと、マリは「うん」と笑顔で答え、自分の腹を、優しく両の掌で包んだ。

## 10.. 郁介

筑波大学付属理化学研究所に勤務する好孝の兄・宮本郁介は、超小型原子炉「アドバンス4S炉」の開発に携わる工学者（エンジニア）である。

郁介は、好孝よりも10年早く、この世に肉体を得て、父親の数奇な運命（人生）を間近で共有しながら死を看取った。

自身は文武両道を地で行く男。幼少期から、特に理系の成績が突出しており、同時に大学を卒業するまでは、全国に名前が知られたバスケットボール・プレーヤーだった。身長は父親と同じく185センチで、邪気のない、素直な性格だったために女性からも、よく好かれたが、いまだ独身。研究所の寮に暮らし、仕事と結婚したつもりで研究に取り組んでいた。

21世紀前後、化石燃料や原子力に代わるエネルギーとして太陽光発電が推奨された時期もあったが、巨大噴火に際して発生する大量の噴煙により長期的に太陽光が遮られる可能性が指摘されて以降、シエールガスやメタンハイドレートが代替エネルギーの主役となった。しかし、岩盤を破壊して天然ガスを採取するシエールガスや深海の大陸棚から結晶を採取するメタンハイドレートも、環境破壊をすることによって得るエネルギーであることは代わりなく、究極的な永久機関「フリー・エネルギー」開発に到達するまでの橋渡しとして、現在「超小型原子炉」に期待が寄せられていた。

巨大な原子力発電所にエネルギー源を依存しようとしたのは、人類史における大きな汚点だ。だが、一定量以下の放射線被爆自体は、人体に対してまったく無害である。

郁介が開発の陣頭指揮を取る「アドバンス4S炉」の「4S」は「スーパー・セーフ・スモール・シンプル」を意味する。恩師である故・服部禎男（はつとり・さだお）国連大学名誉教授の意思を継いだ郁介が、彼の「夢」を実現した暁には、ワン・ワールドの全市民が喝采を贈ることだろう。

年は離れていたものの、郁介と好孝は、とても仲の良い兄弟だった。純粋な血縁であると同時に、霊的な親族関係者でもあった。郁介は、過去生で好孝の父親だったこともある。生きる場所が離れていても、郁介は、好孝の心の動きのすべてに感応した。だから「声」を聴いた時、これから好孝の身に起こることも、すでに察していた。

## 11.. 旅立ち

マリの祖母に結婚の挨拶を済ませ、帰宅した翌朝4時38分のことだった。

自宅寝室の畳の上に敷いた布団で寝ていた好孝は、現実よりも現実的な、リアルよりもリアルな夢を見て、唐突に眠りから覚醒した。

「マリ、起きて」

右隣に横を向いて眠るマリの肩を軽くゆする。

「マリ、マリ、起きて」

「……うむ、む、むううん」

マリが眼を閉じたまま、うるさそうに好孝の手を払う。

「悪いけど、起きて。ちゃんと、眼を覚まして聞いて」

好孝が繰り返すと、ようやくマリは両目をはつきりと開いた。

「何、どうしたの？」

太陽の日差しから眼を守るように、マリは顔をしかめたままだ。

「呼ばれた」好孝が言う。「は？」と言って、マリは余計に顔をしかめた。

好孝は、明るく微笑みながら穏やかに言った。

「もう、こっちに来て。呼ばれたんだ、霊界に。ばーちゃんが呼びに来た」

「え？ もう行くの？」

「おれが決めることじゃないから。でも、肉体があるかどうかは、大した問題じゃない。おれは、これからもマリや春馬と、ずっと一緒にいるし、眼には見えなくなるだけで、これからも、これまでと何も変わらないよ。現実的な部分では、兄貴が必ずマリを支えてくれる」

マリは事態を受け入れるまでに数秒しか時間を要しなかった。赤くした瞼の端に涙を薄く光らせながらマリは言った。

「良かったじゃない、『夢』が叶って。早く、肉体を脱ぎ捨てたかったんでしょ？」

「まあね、こんなに早く『夢』が叶うとは思っていなかったけど。それに、肉体がない方が、より強くマリと春馬を守護することが出来る。早過ぎて申し訳ないのだけど、自分の自由意志でどうこう出来る問題じゃないから」

「別に、こつちのことは気にしなくていい。ヨシタカが、この世から消えていなくなるわけじゃないし」

「一つだけ、頼みがあるんだ」

好孝とマリの視線は、一直線に繋がっていた。部屋に差し込む早朝の、淡い光の中で、お互いの瞳に、お互いの顔が映る。

「机の上、PCの隣に、春馬に宛てて書いておいたノートがあるんだ。春馬が14歳になつたら、渡して欲しい」

「分かった」

マリは言うのと、好孝を両手で強く抱きしめた。

「マリ、愛していたし、これからも愛している。永遠に、ずっと」

「分かっている」

「そろそろ、行くね……」

好孝は呟くと、マリの手を握ったまま、仰向けに転がった。

「ヨシタカ」

マリの透き通った声が耳に届く。「何？」小さな声で返事をすると、マリが生涯、初めて耳にする言葉を口にした。

「わたしも、ヨシタカが好き」

その瞬間、意識が肉体を抜け、気付くと、好孝は自分の身体を宙から見下ろしていた。「抜けたんだ」と、好孝は思った。ようやく、意識が肉体を抜けた。視線を隣に移すと、視線がマリと合った。

「今、おれは死後の世界にいる。マリ、聞こえる？」

肉体を失った好孝が語り掛けると、肉体を持つマリは「うん」と、はっきり口を動かして、返事をした。

「繋がっている？」好孝が語り掛けると、マリが「当たり前じゃない」と声を出して答える。次の瞬間、好孝の意識はマリの肉体へと吸い込まれ、マリの意識と一つになった。マリが、そつと眼を閉じる。好孝の意識はマリの頭から入り、やがてマリの身体を下り、腹の中に入った。そして、そこにあつた小さな小さな生命に、自分の魂が宿ったことを知った。

窓の外から、朝、一番の鳥のさえずりが聴こえた。

「ヨシタカ」

小さな声でささやくと、マリは自分の腹を優しくさすった。

## 『ザ・ブーン』

\*参考文献…中矢伸一著『日月神事 覚醒と実践』（徳間書店）

## おわりに

本作品は、当初『YOUとデストピア』というタイトルだったのですが、途中で、『THE ANSWER』が「はじまり」で、これが「終わり」だな、という感覚が強くなり、『THE ANSWER』と対を成す形で、シンプルに『ザ・ヘヴン』と改題しました。「天国」とは、すなわち「終着駅」のことです。個人にとっても、人類にとっても。

趣味で何気なく書き始めた作品でしたが「はじめに」を書いた時とは、コンセプトもガラリと変わり、結果的に『ザ・ヘヴン』は、小説版『ハートメイカー』になりました。つまり、霊界が指し示した「世直し戦略マニュアル」である『ハートメイカー』によって、現実に「世直し」が成就した暁には、具体的にどのような社会が到来することになるのか、を描き出すハメになったわけです。そもそも、意図したことではなかったのですが……。

私人人は、富士山が噴火しようと、しまいと、洪水が来ようと、来なくても、資本主義社会が変わろうと、変わるまいと、どうでもいいです。関心もないし、何をどうしたいとも、もはや、何も思っていないし、考えていない。

ただ、私人人の人生も、私の家族も、人類全体の命運も、然るべき「氣の流れ」に乗ったのは確かです。

何が起こったとしても、起こらなかったとしても、すべて（人間／世界／地球）は「正しい道」に向けて、歩み始めました。今、私には、明るい「未来」しか見えません。

少なくとも、霊能者の端くれとして、確かに強く、そう感じます。読者の皆様にも、霊（八百万の神々）の加護があらんことを。

著者